

特
門 凡生
4261
卷 3

丹後田邊府志卷之三

松田 本生

朝代大明神之事

附神道三流

大河大明神之事

飛騨守高直たかむら念諸匠しよ令記しるし武用ぶよう事

城曹甲かぶつ鈕つば刀やいば弓ゆみ矢や服ふく胡こ錄りく槍やり銃じゆう砲ぱう馬うま天文てんぶん

飛騨守高直たかむら賜たまは酒さけ於お道みち長なが事こと 附酒類しゆ查しら

三之目錄

昭和三十一年
六月十七日
購求

飛澤守高直遠行之事

田邊八景詩事

建部山賦事

田邊城賦事

山房太夫事

丹後田邊府志卷之三

桂林 靈重撰

朝代大明神事

於代大明神之日之少宮多之日中紀之伊集諾尊之
稱一乃地祇於及代多之日中紀之伊集諾尊之神
既畢靈運當遷是以構造宮於淡路之洲寂然長
隱者矣是是之在也一及之也之報命之日
之少宮之留定之乃之彼古也田邊之境之壘跡之始

朝代大明神



三之三



三流の一は唯一家源と大つたつた名法要集と必く
 唯一家源と一三教一流とありて天竺一水如
 神に即ちこれに二つた本迹縁記に云く是別
 初流より神号あり初流より神号あり神号天竺
 一流より神号あり神号あり別神あり神号人相鬼
 形蛇姿は是一神に密化して別相あり神号
 相馬将門と天下と傳説すも大逆朝敵存也
 平忠文六孫王等とありて初下總國より討ち

初よりあつた平貞盛が前より申して
 若原秀郷・寺首を承りては相馬将門が
 つつた江戸赤田明神ことゝ攝津高田の九頭明神
 此九頭大蛇高田滿仲此高田高田の九頭明神
 此高田の神と一致するに二つた一神體とする
 云ふは兩部習合ことゝ是眞言天台と一佛氏の
 たつた高田の神は皇太神と天竺の神とありて
 高田大日の宮と胎藏界大日の宮と金剛界大日

胎金兩部を陰陽を陰女陽男八人にして如く胎部の
 八名ありて女人祚常を金如立智と帝也る志ありて
 天照皇太神聖武天皇又神祇なりて此れより
 天下太平を祈ふこと也又毘盧舍那大像と造立すは
 是よりして大和國奈良大佛と造らば大像と造立す有
 りしなり神祇なりて七座ありて清浄なりて此れを
 此れとてげはちんや神祇なりて教皇より深く此れを
 ちりて伊勢祚常より信尼と祚羅なりていさなす幸也

生いゝはありて六幡宮を我を八幡大菩薩とてありて若
 狭ひ我の如く祚常なりて佛之神祇なりて豊前宇佐山城
 此れ修業より無事ありて又靈感より人たりて考
 一春日明神を教團法師唯識論と傳せしとて少人
 感一老人の形況に難哉此れ兼とちりて又杉尾明神
 去空也上人の解を此れ法味とてけはりて和列大菩薩王
 於此を設行者諱修しりて生也此れ解也なりて佛を極
 一衣生と起人に誓ふなりて又柔和圓滿の相なり

こせり行者いそ日如長剛強はまをわらふて西奈え
気候波をまじくしこけり時鬼面と具してあ
経る志みは於況にもと輝かこまどし

大河左明神一少事

加佐郡大河大明神を保命神あり天照皇左神同時
代よ和流ひし神體よえとくくあたまいそわらひし
山々山頂より斗る化あり山巔はよ西奈と生し眉より
余密と生し眼より生し稗と生し膝より稲と生し麦

大豆小豆たたりひ生しとて天照人足とく天照皇
右神よ稗とて天照皇大神より生しひ糸稗麦とて陸
田原より小稲とて水田原より天扶回より生しとく
五穀世よかみり加佐郡大河よ於産し稲あり八人皇
丹代代駒宗帝は時あり中河海より生しとく
流ししあり神祇をわたりて

飛澤寺高直命諸長全記武用事

飛澤寺高直二月詔長よ命とて今今

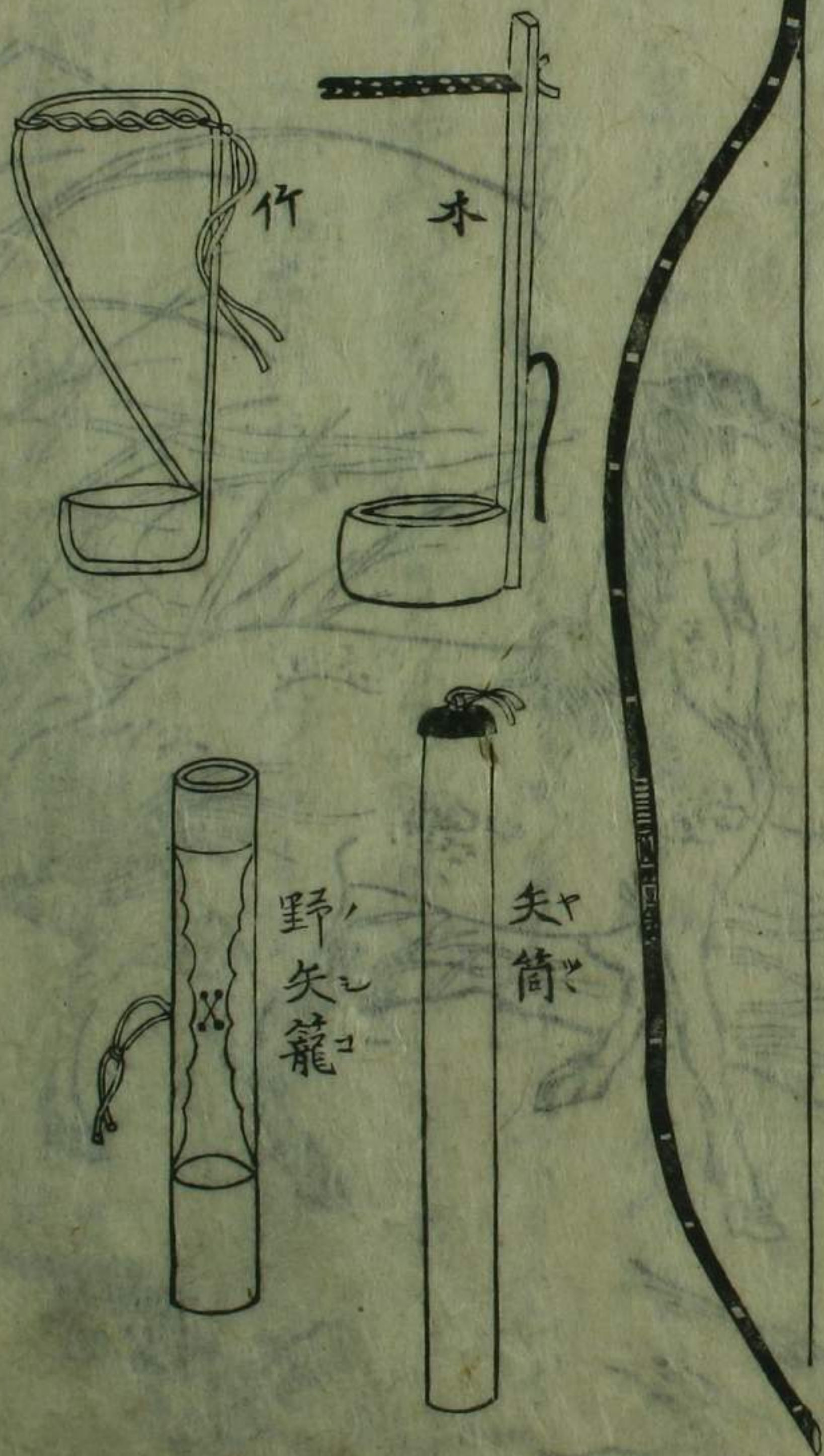
此の所からかたせきと礮石の山花蘇が我界ふかこ色別
見と雷石の子もこ蘭石のヨリ了前漢書よりん
洪蕩蔡のな渠谷のヨリ了漢書よりん
我周の軍もよ異朝えの幾軍の了吳のよ二萬二
千五百人の二軍の了五千人の旅のよ劉寅が直解の
とよのよ陳のよ軍大將士年をく程のよ陳のよ
あり傍の事やかく事王裁之が小学章よりん佳台
ふを敵にかくあり

曾と加のさあり管子よりん考考のよの首鑑
こから頭盛のさありよ塊のよかかあり黃帝
日傳淮南子よりん一世人のよ一説のよ甲の
とがよの訓の曾のよのよの訓のよ世本の
よのよのよのよのよのよのよのよのよのよの
とけのよのよの司馬法よ被甲載曾のよの曾のよの
とし甲のよのよのよのよのよのよのよのよのよの
世のよのよのよのよのよのよのよのよのよのよの

此鈕之素戔嗚尊大地之新治之大地之廣正也天
蠶所之鈕之石上之天蘇雲鈕之
草薙鈕之大地之尾之鈕之
尾張回音湯中村熱田之武甕雷神此鈕之
都靈之鈕之崇神天皇此時五十
豫敷余此鈕之石上神宮之鈕之
川上部之裸伴之鈕之

日本之鈕之崇神天皇此時
崇神天皇此御宇之新羅王子天日槍
耳之羽太玉一箇出石小刀一口持身之鈕之
之鈕之崇神天皇此時
之地之崇神天皇此時
之世之崇神天皇此時
やけ之崇神天皇此時
やけ之崇神天皇此時

屍籠



人せごめがくし、^{しきり}棒弓^{まき}楓弓^{まき}を弓材に極ちるも龍龜子^{りゅうき}
^{まき}盤^{まき}よりつる漆弓^{まき}をぬきゆき素弓^{まき}を志しき張^{まき}を
 けしゆき諸^{まき}諸^{まき}弓^{まき}をよきよきゆきゆき著^{まき}ゆるきゆきゆ
 くは本^{まき}諸^{まき}諸^{まき}をゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
 ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
^{まき}幹^{まき}をゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
^{まき}づ^{まき}強^{まき}代^{まき}をゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
 虎^{まき}兼^{まき}をゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
 矢筒^{まき} 野矢籠^{まき}



こつろ馬と此弓やれ 韃とつろ弓矢と人立つ下韃
 けふ甲やちうの目かえかろし事とてか弓矢の
 ナははあけり新羅のきとをがうひさうあつやあけ
 ハ懐きさうらうらせんんまのあしあすはあーやずれ
 若かづもやあつあけしひもたをかこじひさうけやすあ
 強はらよあはあけえがらうらたうらあだうらあはあけ
 是あり
 矢も箭もやちう目か紀千箭ちけとさうら征矢を鑑れ

ちとよふちの鍋文流鍋之鍋音無鍋目在鍋之以類少利
 久鍋之細律小身律張律金磁頭之墓目之鉄以形
 蟾之以之之墓目以名以之戲新鑊村濃矢之也
 以之鑊之上刺中刺持股鑊身舌鑊尾楊葉指破
 蝶尾腸筋平題箭劍鑊劍矢

胡録



釀



棚象耳魚服之也やちひ空一がらわしきややくく
 ちとよふちの鍋文流鍋之鍋音無鍋目在鍋之以類少利
 久鍋之細律小身律張律金磁頭之墓目之鉄以形
 蟾之以之之墓目以名以之戲新鑊村濃矢之也
 以之鑊之上刺中刺持股鑊身舌鑊尾楊葉指破
 蝶尾腸筋平題箭劍鑊劍矢

陽軍鎧より波拾はだも陣を前よりかけ海陣を
及よかろくあり矢柄を七の毒丸の初元より
女一甲のありそ又武田の初元あり矢柄を
乗交より漢書申屠嘉傳よりそりて弓を張りて
聲張るといひ是れよりそりてと臨張といふなり
槍を實徹より若帝の槍よりそりて漢諸葛亮本より
て代よりそりてそりて又四尺鐵をよりて頭よりそりて續事
始より亮よりそりて苦竹槍をよりて又二又六尺の槍を

苦竹を柏よりそりて槍をよりてと鍵は子也初と世伝の
よめよりそりて槍をよりてと槍をよりてと槍をよりてと槍を
すろんをよりて槍をよりてと槍をよりてと槍をよりてと槍を
陽の利よりそりて槍をよりてと槍をよりてと槍をよりてと槍を
此の編列天王寺にあり元生野よりそりて槍をよりてと槍を
細川隆貞守頼氏を將と楠帯刀正行と頼一と楠か
岩の中より阿間了頼が槍をよりてと槍をよりてと槍をよりてと槍を
槍をよりてと槍をよりてと槍をよりてと槍をよりてと槍を

兵制へいせいより示す所は、身銃みじゆう銅發どうはつ鉄發てつはつ佛郎機ぶつらうき百子銃ひやくしじゆう、
 砲口銃ほうこうじゆう、是等の朝鮮國より名をとりて、將軍機しやうぐんき、
 砲池ほうち、石子砲池いしじゆう、三眼銃池さんげんじゆう、大砲池だいほうち、身銃みじゆう、
 馬銃ばじゆう、帶銃たいじゆう、佛炮臺ぶつぱうだい、武備志ぶひしより、
 移うつる登壇とうだん必寔ひつじつより、棚杖なげざう、
 却かへる銃じゆう、櫻おう、鐵炮てつぱう、
 大だい、銃口じゆうこう、
 龍頭りゅうとう、
 機軌きき、
 子發軌しはつき

砲彈ほうだん、
 銃葉じゆうえつ、
 錦葉きんえつ、
 鐵葉てつえつ、
 佛機ぶつき、
 石いし、
 馬銃ばじゆう、
 佛郎機ぶつらうき、
 百子銃ひやくしじゆう、
 砲池ほうち、
 身銃みじゆう、
 馬銃ばじゆう、
 佛炮臺ぶつぱうだい、
 武備志ぶひし、
 移うつる登壇とうだん、
 棚杖なげざう、
 却かへる銃じゆう、
 櫻おう、
 鐵炮てつぱう、
 大だい、
 銃口じゆうこう、
 龍頭りゅうとう、
 機軌きき、
 子發軌しはつき

馬銃

二つを春の夕々、膝たたく三つを頭ちいさく蹄たたく
くぬと三盞、つら五、駕こは二つを頭たき耳たきして
あぐさ二つを頭あかくしてめぐる三つをたけ経
足あか、はらえん、膝たたく、くぬと三つを頭ちいさく蹄たたく
鬣やも、髯やも、くぬと三つを頭ちいさく蹄たたく
或書く事、東晋は趙固がる、宿、時、郭際、一社
竹林中、くぬと三つを頭ちいさく蹄たたく
畜るは、鼻と吸ひ、はは、勢、力、た、跳、く、ぬ、と、三、つ、を、頭、ち、い、さ、く、蹄、た、た、く

李の氏、獨異志、くぬと三つを頭ちいさく蹄たたく
少事、郵、無、恤、字、も、何、案、も、王、良、こ、も、く、ぬ、と、三、つ、を、頭、ち、い、さ、く、蹄、た、た、く
一、御、く、ぬ、と、三、つ、を、頭、ち、い、さ、く、蹄、た、た、く
何、何、案、も、快、御、す、こ、い、ひ、く、ぬ、と、三、つ、を、頭、ち、い、さ、く、蹄、た、た、く
す、く、ぬ、と、三、つ、を、頭、ち、い、さ、く、蹄、た、た、く
京、賦、も、く、ぬ、と、三、つ、を、頭、ち、い、さ、く、蹄、た、た、く
と、王、良、と、く、ぬ、と、三、つ、を、頭、ち、い、さ、く、蹄、た、た、く
く、ぬ、と、三、つ、を、頭、ち、い、さ、く、蹄、た、た、く

天上四德比まぐさるる星百二十八種好七百八十三星は
星の別名は史記の漢中は星天駟の星は
かまのたつと王良星の星は漢書天文志の
牽牛星の星は河鼓星の星は天鼓の星は眉姑射
星は七夕の天鼓星荆楚人擔鼓の星は織女星は天
孫の星はかくかくの別名は淮南子天文志の
さねははるるまの星は淮南子天文志の
とこの星はまの星は星の星は星の星は星の星は

此の星は勅海決の星は星の星は星の星は星の星は
觀風の星は法令の星は星の星は星の星は星の星は
也及星の星は法令の星は星の星は星の星は星の星は
以下星の主國は法令の星は星の星は星の星は星の星は
まの星の星は法令の星は星の星は星の星は星の星は
まの星の星は法令の星は星の星は星の星は星の星は

飛彈身高直賜酒於近臣事
志源身高直以時進嘉此以時以時以時以時以時以時

任う亭此色とすまゝしゆふ業の是如きばは
 ろか多そかろしう詩話よあづり了卷余よ
 今も母存を小玉こしう佳集此地かひし志如き
 芳日ろしうまゝしう佳景此存とる事ありあ
 海に流ひちたは景と見たるは詩とるあし池り
 待集此佳篇よあづり時ろふ事ありあし
 此ゆふは此八詩よあづり不歌をそんた
 かしかがしるは多あり一集らん事とあひて

田邊八景詩

城園春色

城郭樓門圍樹園

可中森矗千般事

禽音花影動春暄

欲告外人忘語言

いちやあを紀若るんは梅乃春のり
 まへんぬ人よあまこしん

市橋斐涼

市陌板橋商賈人

暮鐘一響絶喧塵

雲晴淡月浮波上
也逐清涼立海濱
市橋やわらじ地人けきき
あまのひささ儀はゆめ

平田旅馬

秋穀穫終南畝田
未容耒耜耕人斷
秋多て人あひしむ
あまのひささ儀はゆめ

圓隆深秋

遼殿圍臺舊茂林
漆霜曝日張紅錦
高梢亂葉入秋陰
賣與詩人價萬金
干代とゆき
あまのひささ儀はゆめ

桂林夜月

古真遠俗桂花叢
地淨水流品物濃
十月一輪無片翳
誤思此夕宿天宮

千里の海をこぼれおちるも
ぬを枯木よもぬる月うらや

建部松雪

巔秃半林層碧巖

松頭戴雪似銀冠

冬一天晴日入遐望

正是丹陰一太觀

誰んか毛髪古くやいん書教やま

みまうは李なりか海志しき

漁汀曝網

託命孤舟漂北溟

梳風浴浪貌零丁

纒求鱗介耽家婦

幾片長網曬晚汀

命とはいささかあまこくはあま

ひささかあまこくはあま

霧海柴舟

宿霧未消江海鄉

扁舟載檝渡滄茫

競争先列求良價

逢友聲高一楫郎

霧は海こくはあまこくはあま

縵薜荔留磔盤埋莓苔汗汗古井湛漢河直直小徑除
 硤确想夫性世仙客真人寓于此與遠則覽大河之漢
 漾洞濇流迤則對群邑熙熙蒨蒨居也最所魁殊者周
 產一般松而直幹指天屈株橫洞非奔蛇之體則騰龍
 之勢也或密葉如貴須則欲喚五太夫嫩葉似梳髮則
 將招十八公矣至若昏霞張羅幕萋雲撐涼閣秋風彈
 素瑟以雪戴銀冠于朝于暮衆鳥閃閃軒翥群蟲嚶嚶
 飛躍萬草含露滾滾得風颼颼其氣入妙此響皆驚鳥神

心聞耳見則便得矣

同詩 長律

好	尖	松	旭	慈	詩
巖	頂	經	日	鴉	客
抽	聳	多	破	求	移
北	霄	歲	煙	餌	遊
域	漢	茂	照	噪	杖
洵	圍	草	暮	蒼	清
美	基	迎	雲	隼	篇
實	跨	一	穿	得	充
無	大	秋	石	樓	錦
疆	洋	長	賜	藏	囊

山 形



三之三十九

建 部



田邊城賦

方輿郡國靡有恒定悉依主宰之德而於變矣此鄉也
北部荒藪之一僻而百有餘載之前號八田村也賢主
長岡氏藤孝以底攻戰之大功終領丹後一國天正九
載春三月五日移車馬於茲少選館于大內歷覽五郡
之地理得此內隩而將好境矣於是深稽陰陽之向背
與四神之相應拓洪基東嶽負于後西嶺羅于前掘統
大壘於總郭外其崖帖盤石可丈餘直曳海水而大瀟瀟

沈養森漫瀟灑活魚潑潑輕舟奮奮作大殿於其中與
千楹固礎萬椽磨釘排廣闔鎖幽戶藻井寥廓席薦弘
敞則建華戟之庫營肥馬之廄崇壁連環長廊綿聯轡
輻臺榭棟高層層樓閣簷深然開譙門四處矣菁瓦舍
日鵲吻入雲門候考時聚散衛士聽鼓徘徊庭際殖猗
猗奇樹園裡培油油莖花庖臣分其勤衆司知其職於
是賢主匡坐而開眉上施仁下含義邦內是以隱服衆
庶恒所慶快有石川瀆紙者焉有板宇織綃客焉加旃

山庄大夫事

由良山側有古蹟是山庄大夫之所住也彼丹波列冰上郡之產也世以鹽蜀椒為家業矣然後來乎丹後由良山陵而居乎世人一條院或村上帝家頗富庶也村上帝天曆年中也其時與列太守謂岩城判官泷氏不意以罪譴謫於筑紫其子有二人姊曰安壽姊弟曰津鹽丸或時謂母曰元為人者必有父我何無焉哉母告之以實也於是欲尋其父而與母同出遠途也終來于越後直井浦

為嘉賊山岡大夫所相售而別袖於海濱而母子異舟矣母者乘佐渡二郎之船安壽津鹽二人同乘官崎三郎之船也三郎運舟而著乎丹後列由良浦於是彼山庄大夫賞安壽津鹽二人而為奴隸矣安壽汲水于津鹽採薪其辛酸不可勝稱山庄大夫之三男就中勇悍強戾痛加呵責似羅殺鬼也津鹽竊逃而竄身於和江村園分寺住僧深慈而忽納古篋而得焉山庄大夫及五子同來而搜索焉住僧偽而答焉大夫五子空去

矣其夜住僧負古筇到洛陽七條朱釋迦權現堂放
之群兒杖而令駕車送清水寺大悲閣其時上卿中有
梅津院者愁建老年無子而同會清水之佛閣祈求
一子也少焉就睡大悲告曰汝子在堂裡何其不識之
哉梅津院夢覺而值津鹽丸喜而為父子之堅契也
直歸我家而養之升紫宸親拜龍顏諸卿誣之於是
津鹽出家譜帝驚見而錫與舊國津鹽願而請丹後
國即重許焉省母於佐渡尋僧於丹後來而入國分寺

厚罄禮謝矣其俊誅戮山椒丈夫及三男三郎同五
郎也餘三子赦之於是彼家始滅焉墓松在干道
所是昔年以竹鋸挽截山庄太夫之頸所也

寶永七 唐寅年九月吉日

御書物所 出雲寺和泉掾

丹波日色有志跡

僧釋之二月日入道學の向來の御書
^テ河津^ノ於^テ抄^ノ子^ニ能^ク延^ル也
^{サキ}前^ノ以^テ知^ル也^ニ書^ス一^ツ心^ヲ分^ク信^ジり
^ニ是^レ久^ク書^キ郷^ニ書^キ後^ニ郷^ニ書^キ事^ヲ書^キ
^ト出^ル性^ヲ修^メ以^テ興^ル而^テ修^メ之^ニ書^キ是^レ也

然^ニハ一^ニ輝^キ也^ト如^ク皇^ノ統^ト高^ク明^ク誠^ニ信^ニ示^ス得^ル也

實^ニ永^ク成^ルハ月^ノ輝^キ如^ク也

終^ニ一^ニサ^ニ子^ニ也

丹後田邊府志卷之三 大尾



